

目 次

第1章 子どもは大人につきあっている？	1
1.1 授業につきあう子どもたち	1
1.2 未熟さとは何か	6
1.3 有能さとは何か	10
1.4 ケアの中の有能さ	13
1.5 本を読むという協働	15
1.6 読み聞かせという協働	18
1.7 大人の死角	22
第2章 子どもと大人の協働をどのように理解するか	29
2.1 コンピタンス・パラダイム	30
2.2 子どもと大人の相互行為を分析するには	33
2.3 リソースとしての「子ども」	39
2.4 もう一度、子どもの有能さとは何か	47
第3章 子どもによる家族会話の組織化	53
3.1 大人を「受け手」にする	54
3.2 大人を「話し手」にする	62
3.3 「傍参与者」になる	66
3.4 夫婦間会話を支える	74

第4章 子育て実践への文化歴史的アプローチ	85
4.1 文化歴史的アプローチとは	86
4.2 活動としての「子育て」と子ども	91
4.3 文化歴史的アプローチに基づく精神発達理論	95
4.4 現代的家族制度の条件	104
4.5 タイム・ポリティクス	106
4.6 実践の痕跡としての家族	115
第5章 保育実践における空間と時間の秩序形成	123
5.1 保育園という制度	124
5.2 一斉発話の意味	126
5.3 一斉発話の協働的達成	130
5.4 もう一度、一斉発話の意味とは	138
第6章 保育を遊ぶ子どもたち	141
6.1 「お誕生会」とは	142
6.2 「お誕生会」の身構え	145
6.3 「だんだんに、ちゃんと」の内実	150
6.4 呼びかけという遊び	156
6.5 やりたいことが違うから保育実践が成立する	167
第7章 子どもにとって、子育てとは何か	173
7.1 無能／有能の二分法を超えて	174
7.2 子育て活動と文化歴史的アプローチ	178
7.3 子どもの声と不同意	183
7.4 沈黙とことば	190

引用文献	193
おわりに	201
索引	205